

養蚕ことばにおける方言分布の形成過程と養蚕業の展開

絹文化！お国ことば調査プロジェクト（群馬県立女子大学）

1 研究の実施状況

- (1) 研究期間：2020年8月～2021年1月
- (2) 実施場所：高山社跡、藤岡歴史館、群馬県立歴史博物館／群馬県立女子大学
- (3) 参加人数：学生5名／教員1名
- (4) 研究内容：先行研究で行われている、全国の養蚕ことば（蚕、桑の実、熟蚕、休眠脱皮などを表す語彙）の方言分布地図を収集し、整理をする。つぎに、世界遺産富岡製糸場伝道師協会との連携事業で行った、平成30年度、令和元年度の調査結果を整理し、考察する。また、藤岡市教育委員会、群馬県立歴史博物館所蔵の高山社授業員、生徒名簿によって、授業員の派遣地や、生徒の出身地を、方言分布地図と照合できるようにデータ整理をする。さらに、養蚕ことばの方言分布と、授業員の派遣地や生徒の出身地とを照らし合わせ、方言分布と人の動きについての関連性を検討する。

2 研究の成果

研究成果の詳細は、別添の研究成果報告書の通りである。主な研究成果は以下の通り。

- ・養蚕ことばに関する全国の方言地図を収集、整理し、データベース化を行った。
- ・養蚕ことばに関する調査は全国的に広く行われており、方言地図も多数存在した。養蚕ことばの方言地図が作成されている地域では、養蚕業が盛んな傾向にあった。
- ・世界遺産富岡製糸場伝道師協会との連携事業で行った、平成30年度、令和元年度の調査結果の特徴と、データの性格を述べた。
- ・〈蚕〉を表す語の方言分布と、語形を考察した。尊敬を表す接頭辞・接尾辞を付する地域では蚕を敬意の対象として扱い、養蚕が生活するうえで重要な存在であった。尊敬を表す接頭辞・接尾辞を付する地域は減少しており、養蚕業の衰退とともに人びとと蚕との関わりも薄くなっていったといえる。
- ・〈桑の実〉を表す語の方言分布と、語形を考察し、その実態を養蚕業の歴史と照合して考察を行った。特に、群馬県を中心に分布する「どどめ」が、方言圏論では解釈しにくい和歌山県に、飛び火的に分布しているという点に注目し、そのような分布の様相を示す理由の考察を行った。和歌山県における「どどめ」は、養蚕技術伝達の中で群馬県から伝播した可能性があることを指摘した。

残された課題は多くかつ大きい。次のとおりである。

- ・群馬県と和歌山県のつながりをさらに明らかにするため、両県において「どどめ」以外にも共通する語形の養蚕ことばがないか調査すること。
- ・和歌山県への授業員派遣の実態を、他の都道府県のそれと比較対照することによって和歌山県の特異性を明らかにしていくこと。



写真1 資料調査と名簿閲覧 (藤岡歴史館)



写真2 中間発表1



写真3 現地調査 (高山社跡)



写真3 中間発表2



写真4 高山社授業員派遣地データベースの一次史料 (右写真 23ページ2行目の派遣地について、閲覧したデータベースに修正の必要部分があった。その旨、藤岡市教育委員会文化財保護課へ報告し、修正依頼を行った。研究活動成果報告書では、修正後のデータによって報告を行った。)

【別添報告書】

養蚕ことばにおける方言分布の形成過程と養蚕業の展開

1. 研究目的

ことばと人の動きは常に連動していくものであり、言語事象の背景には必ず人間の社会的・文化的な営みが存在している。養蚕ことばにおいてもそれは例外ではなく、養蚕の歴史が深く関わっている。日本の養蚕の歴史は古く、古代にまで遡ることができる。明治期には生糸が輸出品の中心となり、日本の近代化を支えるまでとなっていた。

本研究では、養蚕ことばの方言分布を考察する。先行研究の中から養蚕ことばの方言地図を収集・整理し、その方言分布の実態を養蚕業発展の歴史と照合し検討することで、方言分布の形成過程を明らかにする。養蚕業の技術の歴史と伝播が、ことばと共にあることを述べる。

2. 養蚕ことばに関する方言地図の紹介

2-1 データベースとその解説

養蚕ことばに関する調査はさまざまな地域で行われており、調査の結果は方言地図としてまとめられているものも多い。本研究では、まず、養蚕ことばに関する方言地図を収集し、調査項目と調査地域を整理し、データベース化を行った。データベース化に際しては、国立国語研究所「言語地図データベース_言語地図項目DB」(2020.03.17 言語地図集書誌DB 言語地図項目DB 更新)を用いた。まずは、このデータベースに採録されている養蚕ことばの方言地図を抽出した。さらに、データベースに採録されていない方言地図を調査、採集し、補完した。

できあがった養蚕ことばのデータベースをもとに、項目ごとに概略を示す。蚕に関する項目の方言地図は[表1]である。蚕の項目の中には、蚕のほか、蚕の脱皮(山梨県:5枚)、熟蚕になる(長野県木曾:1枚)、蚕蛾(埼玉県秩父地方:1枚)、かいこ神(徳島県阿波)が含まれている。

次に、桑・桑の実・真綿・繭などに関する項目の方言地図を、データベースから整理した結果を[表2]に示す。桑の項目の中には、蚕に葉を与えた後の桑の枝(埼玉県秩父地方:1枚)、葉のついている蚕の枝(埼玉県秩父地方:1枚)、桑を摘む(岐阜県:1枚)が含まれている。また、桑の実の項目の中には、桑の実が美味しいか不味いか(全国:1枚)も含まれている。兵庫県における桑の実の方言を調査した19枚の中には、方言地図だけではなく、JR福知山線沿線、JR加古川線沿線、JR山陰本線鳥取-和田山間のグロットグラム調査が

[表1] 蚕に関する方言地図

地域		項目	蚕	蚕が眠りにつく	蚕のさなぎ	合計
全国			5			5
関東	全域		1			1
千葉県	館山市および安房郡		1			1
静岡県	全域		3		2	5
九州地方	全域		1			1
埼玉県	秩父地方		2	2		4
山梨県	全域		6			6
	郡内地方		1			1
岐阜県	全域		1			1
長野県	木曾			1	1	2
徳島県	阿波		1			1
青森県	津軽				1	1
合計			22	3	4	29

含まれている。

さらに、糸に関する項目の方言地図を、データベースから整理した結果を「表3」に示す。岩手県と熊本県において、絹糸をはじめ、11枚の地図が作成されている。

養蚕ことばに関する方言地図についてデータベース化を行ったところ、全部で106枚であった。方言地図が作られている地域では養蚕業が盛んであったと思われる、それらの地域では、養蚕ことばに注目が集まっていることがわかる。

2-2 「絹文化！お国ことば調査プロジェクト」による2018年度・2019年度調査の結果

2-1で述べたデータベースには含まれない養蚕ことばに関する方言地図として、ここでは群馬県立女子大学が調査し作成した方言地図を紹介する。2018年度から2019年度にかけて、群馬県を訪れた観光客に方言の聞き取り調査をし、養蚕に関する方言語形を収集する「絹文化！お国ことば調査プロジェクト」を実施した。これは、群馬県立女子大学卒業生、水科小百合氏（当時4年生）による提言、「群馬絹遺産を活用した人びとの交流の創出—絹文化！お国ことば調査プロジェクト—」（2015年12月5日（土）付 上毛新聞／世界遺産1周年論文作文コンクール絹の国賞）に基づくものである。水科氏は、絹文化に関することばを調査したことで人との交流を深められたという自身の経験から、お国ことばを通じた人との交流の可能性を述べた。そこで、このプロジェクトは、「養蚕ことば」をめぐって人びとの交流を創出することを目的に、養蚕ことばを中心とした話題が展開することで、群馬の絹遺産を広く深く学ぶためのきっかけ作りとなると考え行われた。

調査は、富岡製糸場世界遺産伝道師協会と共同して行った。2018年度に銀座まちなか交流館（富岡市）で2回、2019年度に高山社跡（藤岡市）と銀座まちなか交流館で各1回、計4回実施した。調査対象は現地を訪れた観光客である。学生が観光客に「蚕」を表す方言（図1・図2）と「桑の実」を表す方言（図3・図4）について質問し、観光客は自身の言語形成地のことばを回答する。調査で得られた方言語形は、記号化してシー

[表2] 桑・桑の実・真綿・繭などに関する方言地図

項目		桑	桑の実	真綿	繭	合計
全国			6	4		10
中国地方	全域		1			1
静岡県	全域	3	1			4
埼玉県	秩父地方	2			2	4
山梨県	全域		1	1	1	3
岐阜県	全域	1	1	2		4
長野県	全域		1			1
	木曾		1			1
	上伊那		3			3
鳥取県	全域		1			1
富山県	越中五箇山		1			1
	立山町		1			1
福井県	南川・北川		1			1
	わかさ美浜		1			1
神奈川県	全域		1			1
島根県	出雲飯石郡		1			1
岩手県	全域		1			1
	安代町浄法町			1		1
	閉伊川流域			1		1
岩手県秋田県両県境			1			1
千葉県	夷隅川流域		1			1
	房総南端部		1			1
熊本県	天草			1		1
新潟県	糸魚川			1		1
兵庫県			20			20
合計		6	46	11	3	66

[表3] 糸に関する方言地図

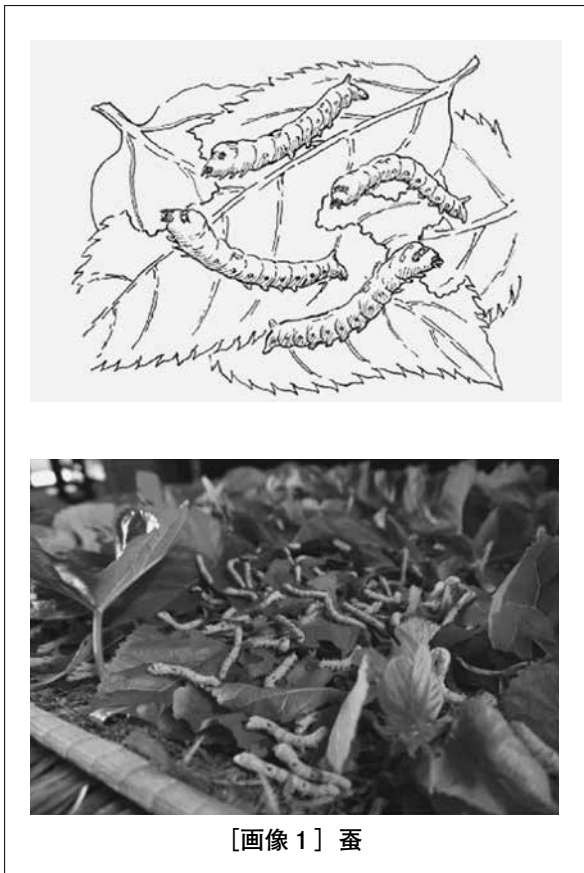
項目		糸	絹糸	木綿糸	機糸	織糸	合計
全国		1	1	1	1		4
岩手県	安代町浄法町	1					1
	閉伊川流域	2					2
熊本県	天草	1	1	1		1	4
	合計	5	2	2	1	1	11

ルを作成し、事前に用意した全国白地図の中に貼り付けていった（図1～図4）。使用した調査文と画像、調査票は以下の通りである。なお、[画像1]のイラストは『全国方言分布調査調査票付図』（2010、国立国語研究所）によるものである。

【調査文】

- (1) 絵 これは何と言いますか。成長すると白っぽい糸をはいて繭を作ります。その繭から糸をとって、絹を織ります。
- (2) [かいこ] が食べる [桑] になる実を何と言いますか。

【画像】



【調査票】

調査日 _____ 年 _____ 月 _____ 日

調査場所 _____

記入者 _____

絹文化！お国ことばプロジェクト 2018 調査票

質問

(1) 絵 これは何と言いますか。成長すると白っぽい色の糸をはいて繭を作ります。その繭から糸をとって、絹を織ります。

(2) [かいこ] が食べる [桑] になる実を何と言いますか。

フェイスシート

1 話者の居住歴（言語形成地）
 上で教えていただいたことばは、どこの土地のことばですか。
 中学生（15歳）までに過ごしたことがある土地を、市町村まで教えてください。

歳～	歳	
歳～	歳	
歳～	歳	

2 話者の生年 大正・昭和・平成 _____ 年（西暦 _____ 年）

3 話者の性別 男 ・ 女 _____

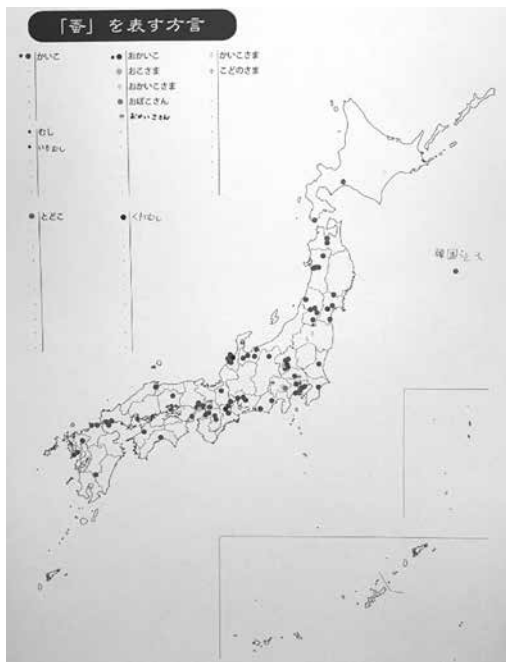
メモ

回答が得られたのは、全国各地から訪れた観光客372名で、平成23年（2011）生まれ（当時7歳）から昭和元年（1926）生まれ（当時93歳）の話者であった。調査の結果、[図1]～[図4]のようになった。

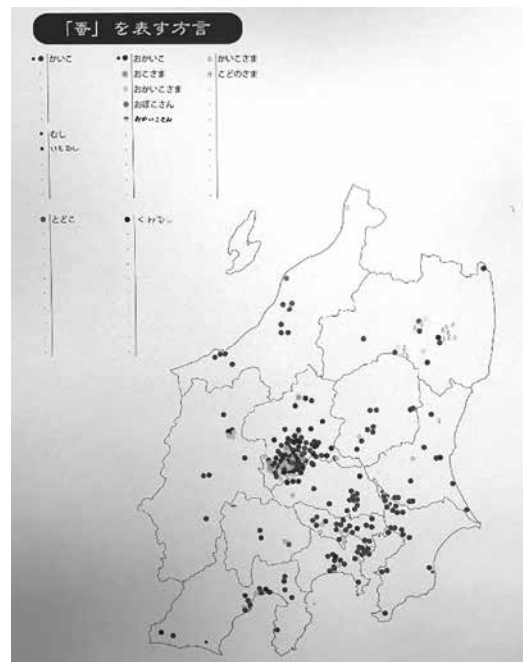
「蚕」を表す方言については、[図1]を見ると、全国的に「かいこ」が広く分布している。「かいこ」の分布が目立つ中、[図2]を見ると、群馬県のみ「おかいこ」「おこさま」などの語形の勢力が圧倒的に強い。福島県では「かいこさま」の分布が目立つ。群馬県を含む周辺の地域で「おかいこさま」や「おほこさん」、群馬県周辺地域と近畿・中国地方の一部で、「おかいこさん」などの語形が確認できた。

「桑の実」を表す方言については、[図3]を見ると、全国的に「くわのみ」が広く分布している。[図4]を見ると、群馬県を中心に「どどめ」の分布が見られるが、群馬県を除く地域は「どどめ」よりも「くわのみ」の勢力が強く、群馬県のみが圧倒的に「どどめ」の勢力が強いという結果となった。福島県では「くわご」が「かいこ」と同等の勢力として確認できる。そのほかにも、新潟県で「くわいちご」、栃木県で「ぐみ」、山梨県で「くわぐみ」「かすみ」「かみず」、神奈川県で「くろすぐり」といった語形が確認された。

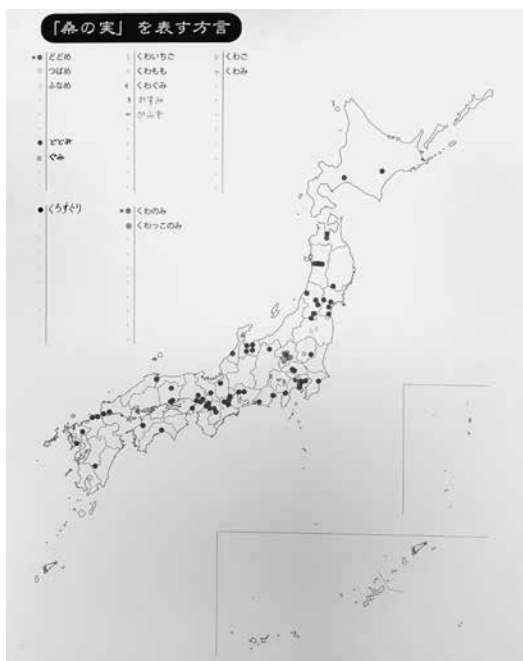
なお、以上述べた分布は3章で述べる全国方言分布地図と重なる結果となった。



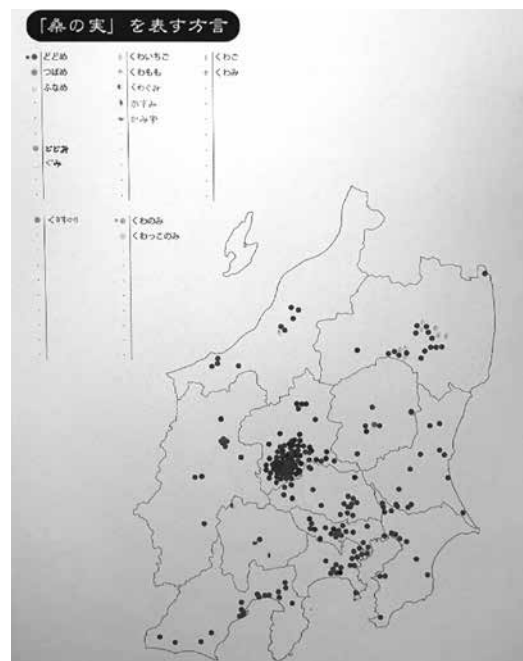
【図1】「蚕」を表す方言の調査結果
(全国)



【図2】「蚕」を表す方言の調査結果
(群馬県周辺地域)



【図3】「桑の実」を表す方言の調査結果
(全国)



【図4】「桑の実」を表す方言の調査結果
(群馬県周辺地域)

ただし、調査で完成した地図では、先述したような方言の分布は確認できるものの、世代差を考慮した地図ではないため正確な方言分布の解釈をすることはできない。これは本調査が、方言収集よりも「養蚕文化を知るきっかけとなること」や「人びとの交流」という目的に沿って実施され、エンターテインメント性をはらむものであったことによる。よって、今後は地図の詳しい解釈とともに、語形や話者の年齢・言語形成地などを含めた回答のデータベース化を進め、世代ごとの地図化を行う必要がある。

3. 〈蚕〉と〈桑の実〉の全国方言分布

3-1 〈蚕〉と〈桑の実〉の方言分布を考察する意義

2-1で述べたとおり、養蚕ことばに関する方言地図は数多く存在する。地図から方言分布の実態を見ることが、養蚕ことばについてさらに知る手がかりになると考える。今回は養蚕ことばの中で〈蚕〉と〈桑の実〉の方言分布を取り上げる。〈蚕〉は養蚕業の中心となるものであり、養蚕ことばを研究するうえで欠かせない語であるといえる。また、養蚕業は桑の栽培から作業が始まる。その時に最初に話題に上ったであろうものが〈桑の実〉である。2-1では、先行研究による〈桑の実〉の方言地図は多数存在することが確認された。よって、養蚕業に特に関わりが深いと考えられるこの2つの養蚕ことばを中心として、養蚕ことばの方言分布を考察していく。

3-2 〈蚕〉の方言分布の実態

これまでに地図化されている〈蚕〉の全国方言分布地図を2枚取り上げる。[図5]と[図6]である^[注1]。これは[表1]の、全国における蚕の方言分布地図5枚のうちの2枚にあたる。

[図5]は、東北大学方言研究センターが行なった「消滅する方言語彙の緊急調査研究」をもとに作成された言語地図である。この調査は全国2000地点を対象にして、2001年に行われた。話者は1932年以前生まれ（調査当時70歳以上）の人を対象としている。蚕の挿絵と共に「右の絵をごらんください。絹糸をとるために飼うガの幼虫です。クワの葉を食べてマユを作ります。この虫を何と言いますか。」という質問文を提示し、その結果を地図化したものが[図5]となる。全国的にカイコという形式が広く分布しているが、特に東日本ではオコサマ・カイコサマ・オカイコサマといった形式が存在する。これらの形式の構成要素は以下の通りとなる。

オコサマ→御/蚕/様
 カイコサマ→蚕/様
 オカイコサマ→御/蚕/様

蚕を表す「コ」「カイコ」に、尊敬を表す接頭辞「オ」や、敬称の接尾辞「様」が付けられており、このほかにもボコサマ・オボコサマ・ヒメッコサンなど、尊敬を表す接頭辞・接尾辞がついた形式が多く存在している。

一方、[図6]は、2010年から2015年にかけて国立国語研究所と全国の方言研究者が共同で行った「全国方言分布調査」のうち、蚕を表す語の調査結果を地図化したものである。この調査は、全国554地点で、原則として70歳以上で長期にわたり各地点から移動していない人を対象に行われた。調査方法は「消滅する方言語彙の緊急調査研究」と同様で、質問文の提示による。蚕を表す語の調査にあたっては、蚕の挿絵と共に「これは何と言いますか。成長すると白っぽい色の糸をはいて繭を作ります。その繭から糸をとって、絹を織ります。」という質問文が提示された。

[図6]は[図5]と同様にカイコが全国的に広く分布していることが分かる。経年変化による分布域は共通する部分がほとんどであるが、[図5]と比較すると共通語形式の「カイコ」の分布域は広がっていることが読み取れる。養蚕業の衰退とともに蚕との関わりも薄れ、蚕を敬意の対象として見なくなった可能性がある。

養蚕は生活を支える産業であった。〈蚕〉に尊敬を表す接頭辞・接尾辞がついた形式が存在している地域では、〈蚕〉は敬意の対象として扱われている。このような敬称がある地域は、養蚕の先進地域である可能性が高い。

3-3 〈桑の実〉の方言分布の実態

先行研究によりこれまでに地図化されている〈桑の実〉の全国方言分布地図を、3枚取り上げる。[図7]～[図9]である^[注2]。これは[表2]で整理をした全国における桑の実の方言分布地図6枚のうちの3枚にあたる。

[図7]は、群馬県立土屋文明記念文学館所蔵「伊藤信吉方言資料」をもとにして作図した、〈桑の実〉の方言分布である。この調査では、〈桑の実〉を何と呼ぶかということに限定して調査が行われている。伊藤信吉は、

おもに詩人を方言話者として調査した。調査時期は1979年で、話者の生年は不明である。方言辞典などの文献から得た方言語彙を除き、伊藤が直接に情報提供者から得た方言語彙のみを記した方言分布地図が〔図7〕である。

東北地方に「くわご」、関東地方を中心に「どどめ」、中部地方に「くわずみ」「くわみず」、北陸地方に「つばめ」、西日本に「くわいちご」が分布している。注目したいのが、和歌山県に「どどめ」がみられる点である。群馬県立土屋文明記念文学館所蔵「伊藤信吉方言資料」のうち「桑の実関係」を確認すると、和歌山県西牟婁郡白浜町の「どどめ」を採録している。「どどめ」は関東地方に分布している語であり、遠く離れた和歌山県で「どどめ」が使われていることは、方言圏論では解釈しにくい。

語の構造に注目すると、「桑の実」は〈桑〉の〈実〉であることを示す句、「くわご」「くわいちご」などは「くわ/ご」「くわ/いちご」というように前部要素と後部要素に分けられる複合語である。それに対し「どどめ」や「つばみ」「ふなめ」は形態素に分節できない単純語である。単純語は一次名称であり、直接的に命名するという事は、その地域の人びとにとって、それだけ桑の実に対する興味関心が高かったといえる。つまり、〈桑の実〉に単純語を与えている地域は養蚕に関わりが深かった地域であると言える。

〔図8〕は東北大学方言研究センターが行なった「消滅する方言語彙の緊急調査研究」をもとに作成された方言地図である。この調査は全国2000地点を対象にして、2001年に行われた。話者は1932年以前生まれ（調査当時70歳以上）の人を対象としている。調査年で比較すると、〔図7〕とは22年の差がある。〔図7〕の話者の年代が不明であることや、調査地点数の差が大きいことなどから単純な比較はできないが、〔図8〕でも東北地方に「くわご」、関東地方を中心に「どどめ」、中部地方に「くわずみ」「くわみず」、北陸地方に「つばめ」、西日本に「くわいちご」が分布していることは共通する。また、和歌山県に「どどめ」がみられる点でも〔図7〕と共通している。和歌山県内の「どどめ」の分布する地点は、伊都郡かつらぎ町大字佐野、有田郡金屋町谷、日高郡中津村上田原である。

桑の実は、養蚕に用いる桑と密接である。〔図7〕と〔図8〕における「どどめ」の分布は、関東地方と和歌山県の養蚕を通じた交流が背景にある可能性が漂う。

また、〔図9〕は2010年から2015年にかけて国立国語研究所と全国の方言研究者が共同で行った「全国方言分布調査」を図にしたものである。この調査は、全国554地点で、原則として70歳以上で長期にわたり各地点から移動していない人を対象に行われた。〔図8〕の結果から、10～15年後の方言の実態を示す。この図では和歌山県の「どどめ」という語形は消え、全国的に広く分布する「くわのみ」と西日本に広く分布する「くわいちご」という語に変わっている。和歌山県では養蚕の衰退とともに「どどめ」という語が使われなくなった可能性がある。一方で群馬県・埼玉県・東京都を中心とする関東圏では、「どどめ」が広がりをもって分布し、勢力を保っている。

以上、〈桑の実〉の方言分布を見てきたが、4章では群馬県を中心に、和歌山県にも分布している「どどめ」の分布の解釈を行うこととする。

〈蚕〉を表す語の方言分布

- ⊠ コ
- カイコ
- ◐ ケコ
- マユコ
- ◑ クワコ
- ボコ
- ◇ コガイ

- ⊠ オコ
- ⊡ オココ
- ⊢ オボコ
- ⊣ オカイコ
- ⊤ トドコ
- ⊥ ヒメッコ
- ⊦ オシロ

- ⊧ ボコサマ
- ⊨ カイコサマ
- ⊩ カイコメ
- ⊪ ケゴジョ
- ⊫ ケゴドン
- ⊬ コガイサマ
- ⊭ シロサマ

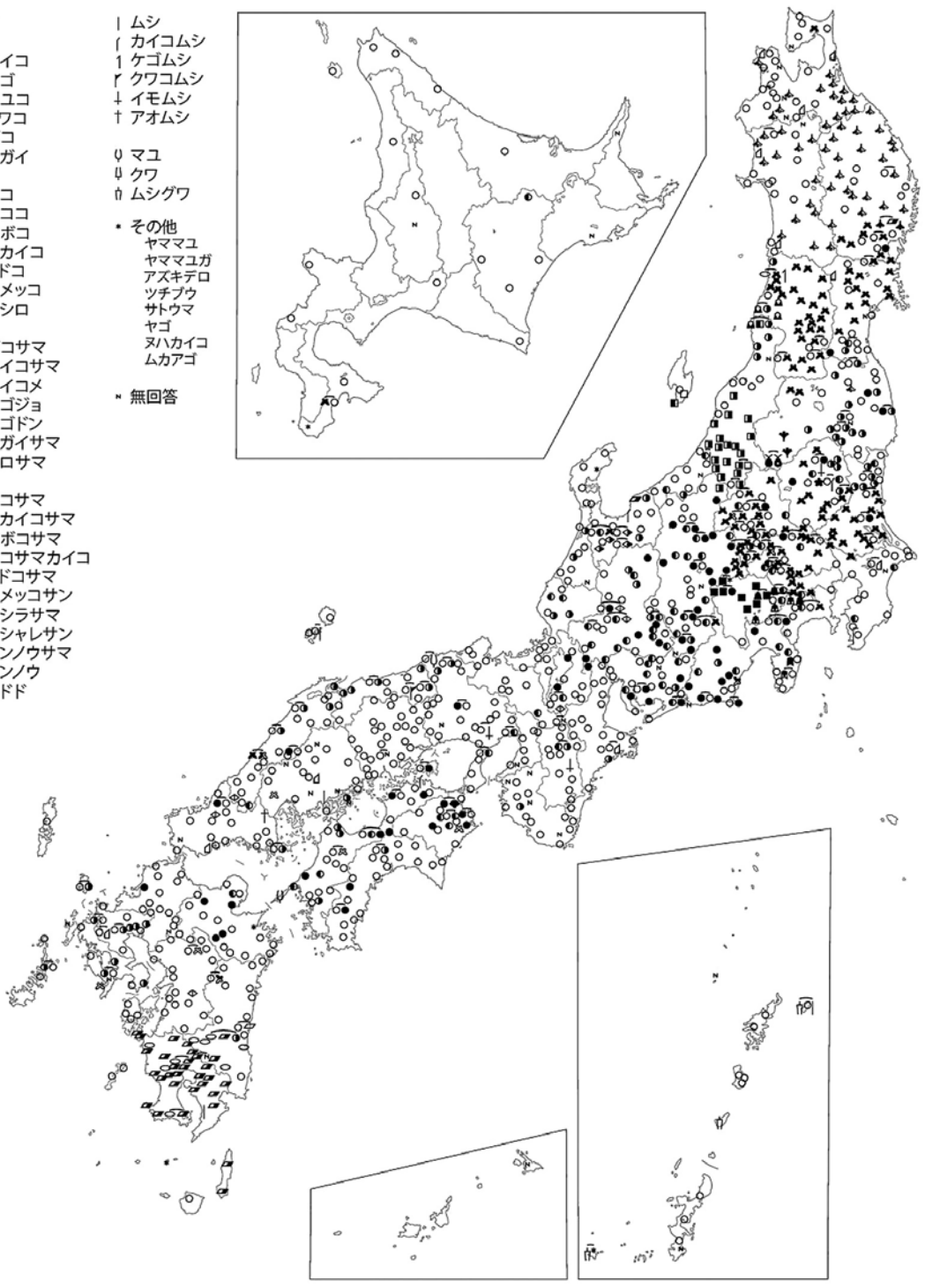
- ⊮ オコサマ
- ⊯ オカイコサマ
- ⊰ オボコサマ
- ⊱ オコサマカイコ
- ⊲ トドコサマ
- ⊳ ヒメッコサン
- ⊴ オシラサマ
- ⊵ オシャレサン
- ⊶ ノンノウサマ
- ⊷ ノンノウ
- ⊸ アドド

- | ムシ
- | カイコムシ
- | ケゴムシ
- | クワコムシ
- | イモムシ
- | アオムシ

- ◐ マユ
- ◑ クワ
- ◒ ムシグワ

- ・ その他
- ヤママユ
- ヤママユガ
- アスキデロ
- ツチブウ
- サトウマ
- ヤゴ
- ヌハカイコ
- ムカアコ

- ・ 無回答



東北大学方言研究センター
「消えゆく日本語方言の記録調査」資料(2001年度調査)より地図化

[図5]

〈蚕〉を表す語の方言分布 (NLJ)

- カイク
- ◉オカイク
- ◊カイクサマ
- ◊コドノサマ
- ◊コナサマ
- ◻ボコサマ
- ◻ケゴジョ
- ◉ノンノーサマ

- ◉オコサマ
- オカイクサマ
- オボコサン

- ∨トドコ

- ノグイコ

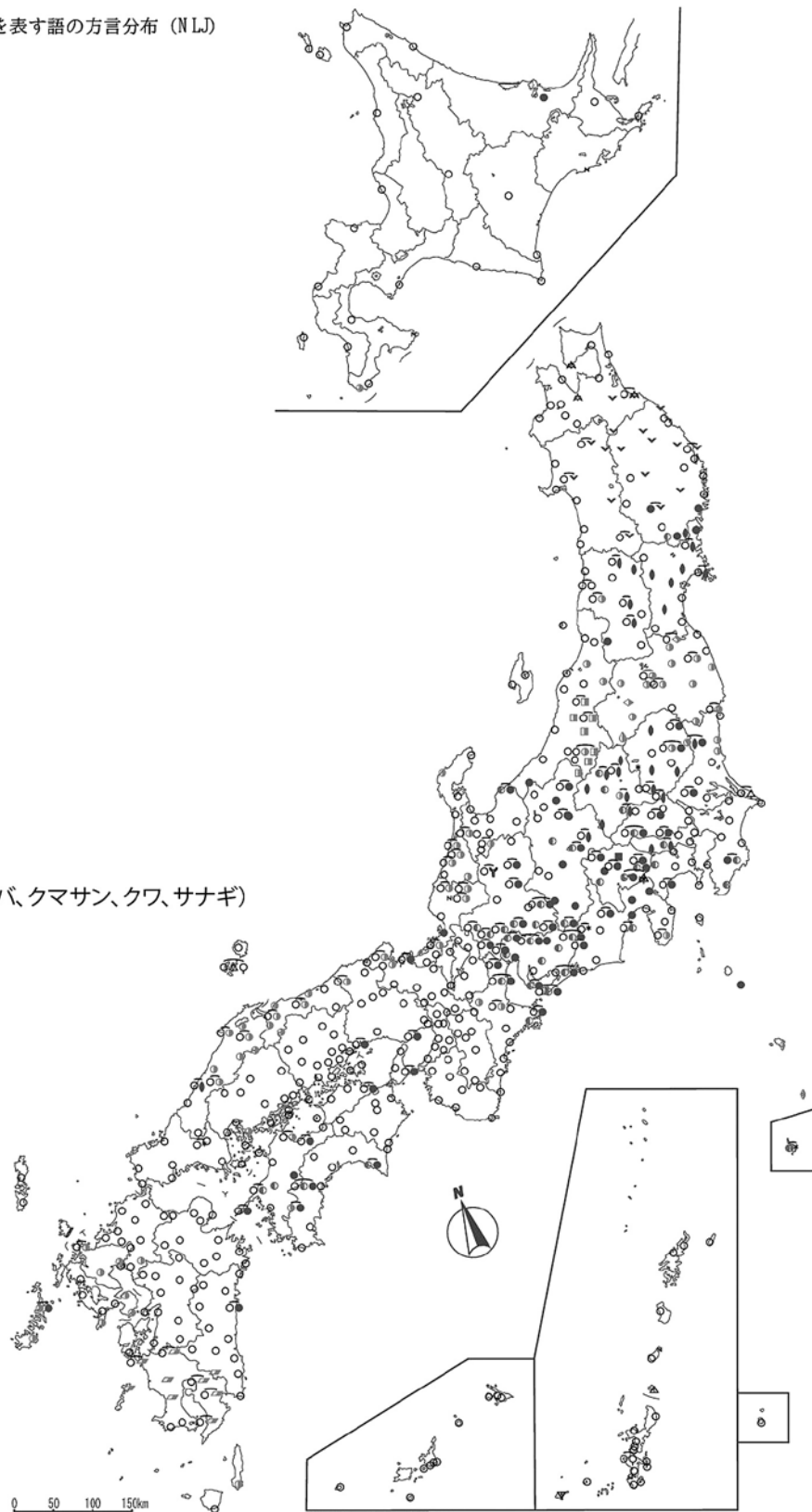
- ∨コガイ

- △ムシ
- △ムシジャ
- ▽ムシグワー
- ◇カイクムシ
- △クワムシ
- ♣カネノムシ

- ▲ゲンダガ

- ・その他(ジサンバ、クマサン、クワ、サナギ)

- ⋈無回答

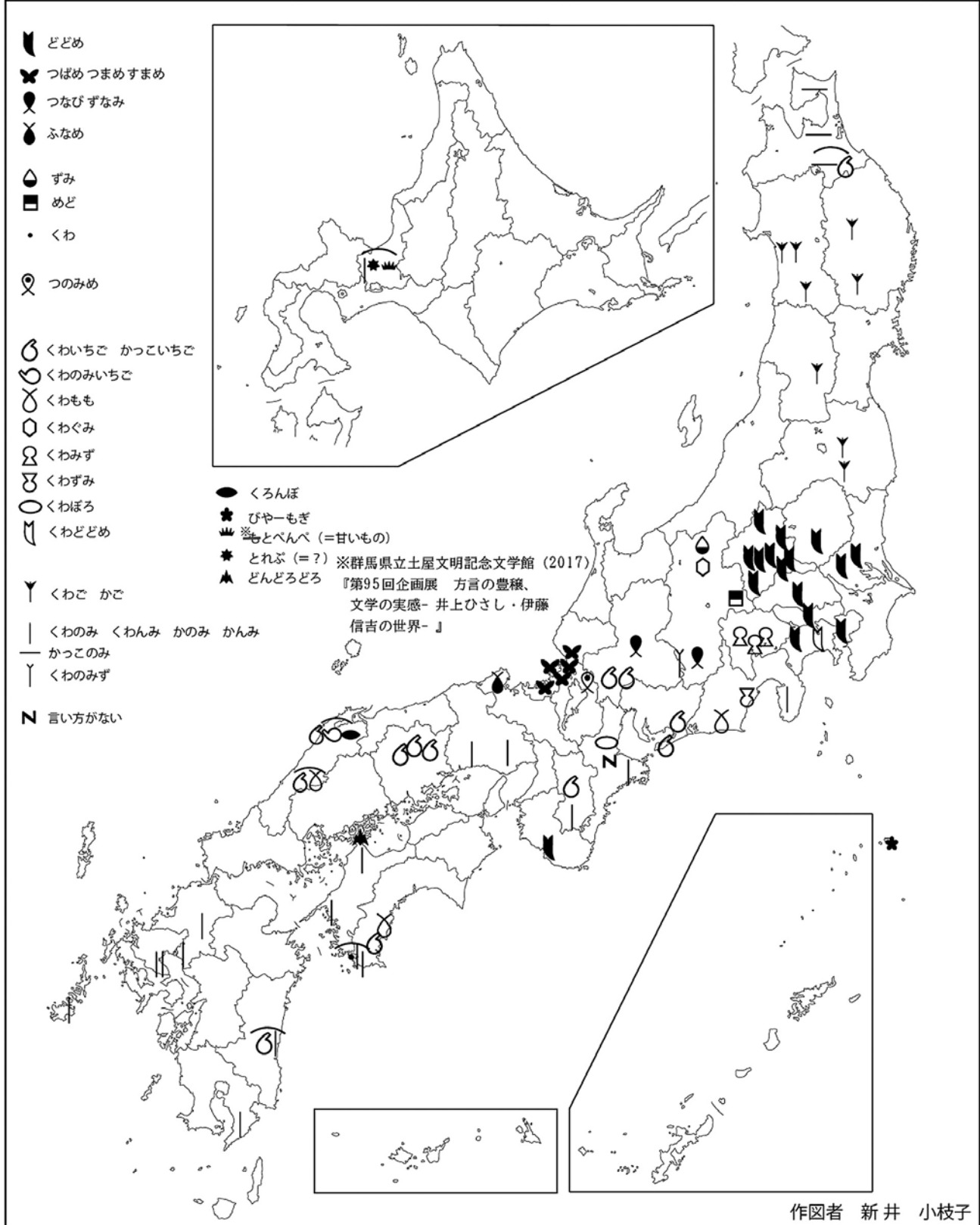


大西拓一郎編 (2016)

『新日本語地図 一分布図で見渡す方言の世界』朝倉書店

[図6]

伊藤信吉方言資料による〈桑の実〉を表す語彙一統合図（第2版）



[図7]

〈桑の実〉の方言分布

- ▼ どどめ
- ◆ ふなめ
- ✱ しまめ
- ▼ つばみ

- ▲ ぐみ
- ずみ
- みず
- いちご

- くわ
- ! なでち

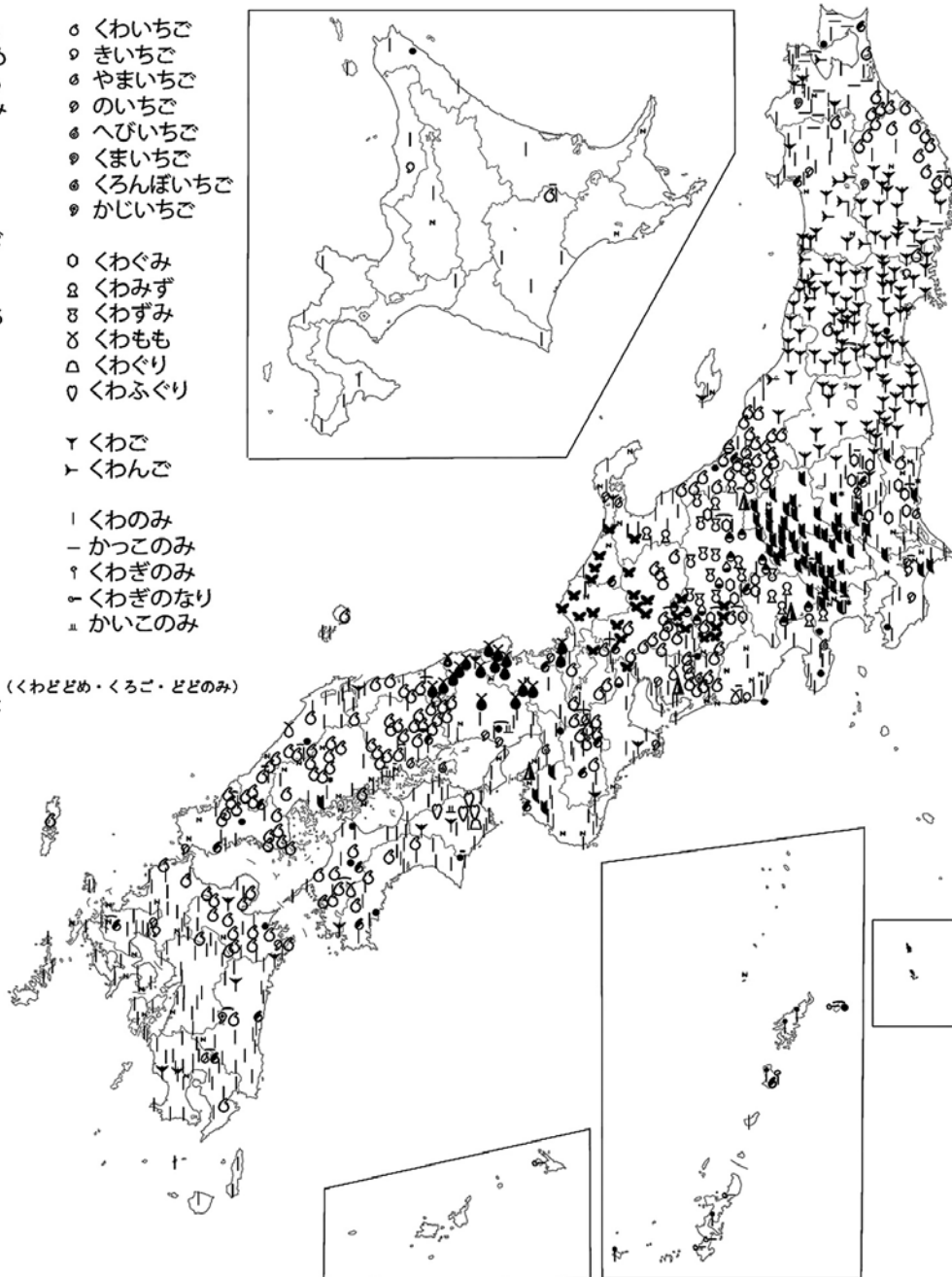
- くわいちご
- きいちご
- やまいちご
- のいちご
- へびいちご
- くまいちご
- ころんぼいちご
- かじいちご

- くわぐみ
- ⊗ くわみず
- ⊗ くわずみ
- ⊗ くわもも
- △ くわぐり
- ▽ くわふぐり

- ⌒ くわご
- ⌒ くわんご

- ! くわのみ
- かっこのみ
- ↑ くわぎのみ
- ← くわぎのなり
- かいこのみ

- その他(くわどどめ・くろご・どどのみ)
- 無回答



東北大学方言研究センター
「消えゆく日本語方言の記録調査」資料(2001年度調査)より地図化

[図8]

〈桑の実〉を表す語の方言分布 (NLJ)

- ⊥ ドドメ
- ⊘ フナメ
- ⊙ ツナミ
- ⊚ ツバメ
- ⊛ ズンナミメ

- ⊥ ドド
- ⊥ ナデチ

- ⊙ イチゴ
- ⊙ グミ
- ⊙ メズ
- ⊚ ボロ
- ⊚ フグリ

- ⊙ ミ

- ⊙ クワイチゴ
- ⊘ クワモモ
- ⊙ クワグミ
- ⊙ クワズミ
- ⊙ クワミズ
- ⊚ クワボロ
- ⊚ クワフグリ

- ⊚ クワゴ
- ⊚ クワミ
- ⊚ クワバ
- ⊚ クワーヌキナリ
- ⊚ クワーギナイ

- ⊙ クワンボ
- ⊙ カンツバ
- ⊙ カンチョボ

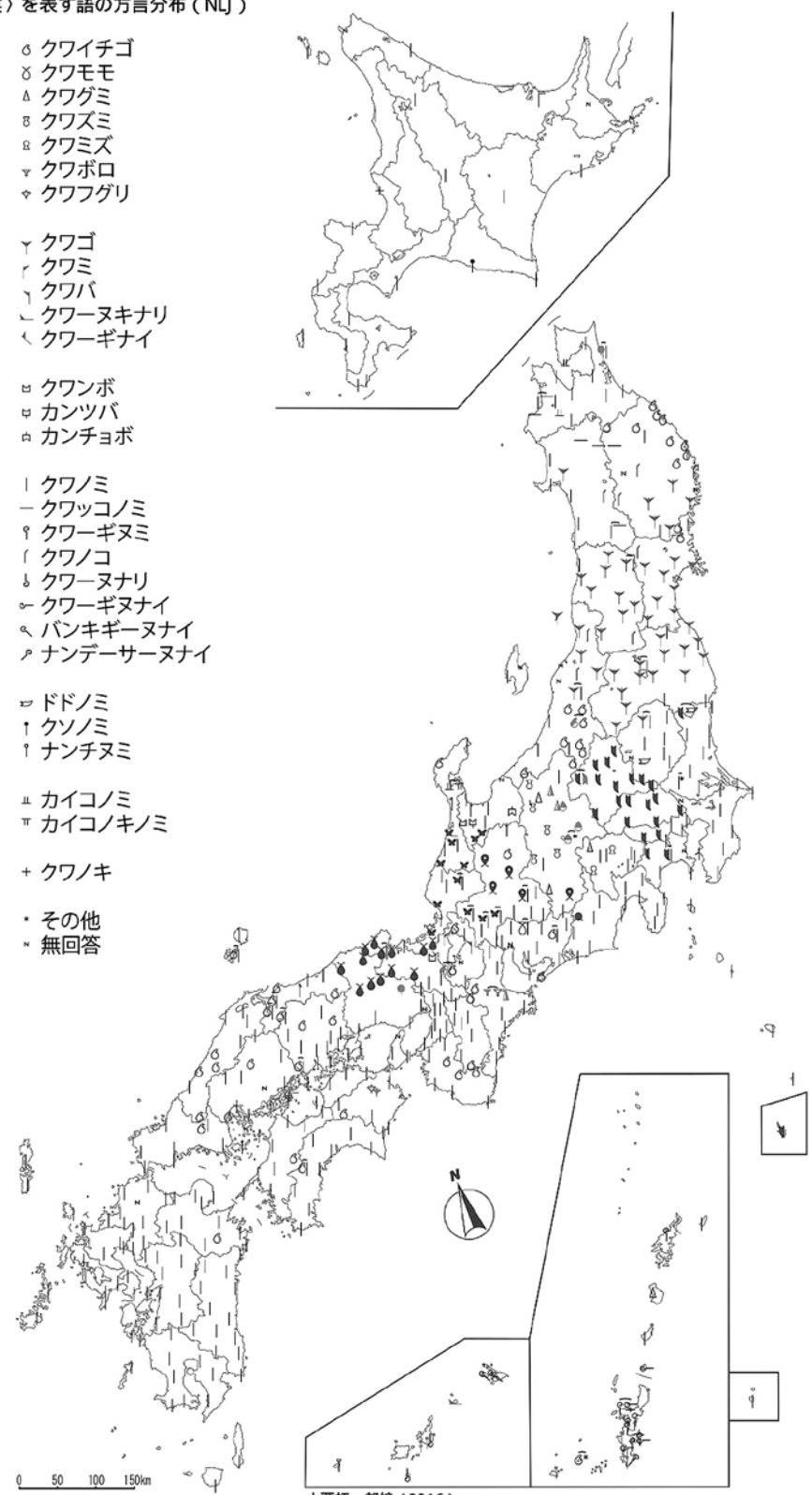
- ⊥ クワノミ
- ⊚ クワツコノミ
- ⊙ クワーギヌミ
- ⊥ クワノコ
- ⊙ クワーヌナリ
- ⊚ クワーギヌナイ
- ⊙ バンキギーヌナイ
- ⊙ ナンデーサーヌナイ

- ⊙ ドドノミ
- ⊥ クソノミ
- ⊥ ナンチヌミ

- ⊙ カイコノミ
- ⊙ カイコノキノミ

- ⊙ クワノキ

- ⊙ その他
- ⊙ 無回答



大西拓一郎編 (2016)
『新日本言語地図 一分布図で見渡す方言の世界』朝倉書店

[図9]

4. 方言地図の解釈と養蚕の歴史

明治以降、輸出により養蚕業は収益をもたらす産業となった。外貨を稼ぐため、今まで養蚕を行ってこなかった地域も養蚕業に乗り出す。そこで、養蚕先進地域である群馬県の高山社は養蚕の学校として全国から集まった生徒に養蚕の技術を伝え、また、高山社から全国各地に授業員を派遣して養蚕の技術を教えた。ことばは人の動きによって変化していく。養蚕技術を伝える人びととともに、養蚕ことばも移動したことを述べる。

4-1 「どどめ」の分布域と養蚕の歴史

群馬県を中心とする「どどめ」が和歌山県にも分布する背景を明らかにするために、まずは両県の養蚕業の概要を整理していく。群馬県と和歌山県における古代から近代までの養蚕業の歴史と明治期の取り組みを、『群馬県史 通史編5 近世2』『群馬県史 通史編8 近代現代2』『和歌山県史 近現代一』によって把握する。

群馬県の養蚕の歴史は古く、奈良時代の上野国の頃から平安時代にかけて繻を調として貢納したという。室町時代には仁田山絹と日野絹が全国に知られるようになり、近世に入ると戦で用いられる旗絹の上納が定例化し、同時に絹が物納から金納となったことを契機に絹生産が盛んになる。しかし、当時は封建社会特有の経済統制があるほか、絹衣服の着用が上流階級に限られていたこともあり、その発展には限度があった。近代に入ると幕末開港による絹の需要増加と横浜との地理的な近さが影響して、群馬県の養蚕業は飛躍的に伸び、明治5年には全国初の官営模範工場である富岡製糸場が設立されるに至る。しかし、繻の品質は先進県のなかでは低いものとされており、養蚕改良に対する関心が高まっていった。そのため、明治10年から20年にかけては各地で養蚕農民による集会や養蚕結社が組織されるなど、養蚕技術の向上に向けた動きが盛んに行われた。高山社もその組織の一つである。

一方の和歌山県は、古代から近世まで養蚕の規模は微々たるものであったという。本格的に開始するのは生糸が輸出商品として注目され始めた幕末開港の頃であり、これを契機に様々な取り組みが行われ、養蚕の定着が図られていく。民政局により養蚕が奨励されて以降、明治6年には富岡製糸場へ養蚕伝習生が派遣され、県内の生糸乱造の矯正を目的とした生糸改会社設立が県に認められるなど、養蚕改良の動きが盛んに行われる。明治10年代には坐繰製糸法など養蚕先進地域からの技術導入が盛んに行われるがあまり定着しなかったため、養蚕伝習所や模範製糸工場が開設され始める。このほか、士族授産としても蚕桑事業が企てられた。これら取り組みから和歌山県内で養蚕が定着し始め、明治20年代に入ると蚕糸業組合が結成される。

以上、両県の養蚕業の歴史や取り組みを整理し、両県ともにその歴史を古代まで遡ることができる点、幕末開港を受けて大きく発展したという点で共通していることがわかった。しかし、和歌山県の養蚕は古代から近世まで微々たるものであったのに対し、群馬県では古代より絹を特産物としており、養蚕の定着度合いには大きな差がみられる。明治期においても、群馬県では生糸の生産と改良に集中しているのに対し、和歌山県では養蚕の奨励から定着に集中しており、養蚕に対する取り組みの段階に大きなズレがある。ここから、群馬県が養蚕先進県であったのに対し、和歌山県は養蚕後進県だったといえる。

4-2 「どどめ」の分布域と高山社授業員の関わり

3-3で述べたように、桑の実を表す方言「どどめ」の分布は特徴的なものとなっている。[図7]・[図8]では関東域を中心に分布する「どどめ」が和歌山県にも飛び火するように分布し、[図9]では和歌山県での分布が消えて関東域のみの分布となっている。なぜ関東域の「どどめ」が和歌山県でも使用されたのか、その背景を養蚕業の視点から考察する。

4-1で述べた通り、群馬県は近世以前から養蚕が盛んな地域だったが、特に明治期に大きく発展し養蚕技術改良の取り組みが盛んに行われた。この養蚕技術改良の動きの一つに、高山社の取り組みが挙げられる。高山社とは、養蚕技術の研究のほか、全国各地から生徒を受け入れて同社の養蚕技術を教え、ここで養蚕技術を学んだ人を授業員として要請があった県へ派遣することで、日本全体の養蚕技術の改良に大きく貢献していた組織である。この生徒の受け入れと授業員の派遣は全国各地を対象に広く行われており、そのなかには和歌山県も含まれていた。この高山社とのつながり以外にも、和歌山県では明治初期に富岡製糸場に養蚕伝習生を派遣するなど、群馬県を養蚕先進県として意識していたことがわかる。今回はこの高山社を介した人の動きに着目し、【和歌山県に分布する「どどめ」は、高山社による養蚕技術伝達の際に群馬県から伝播したのではないか】という仮説を立てた。この仮説を検証する第一段階として、以下の調査を行った。

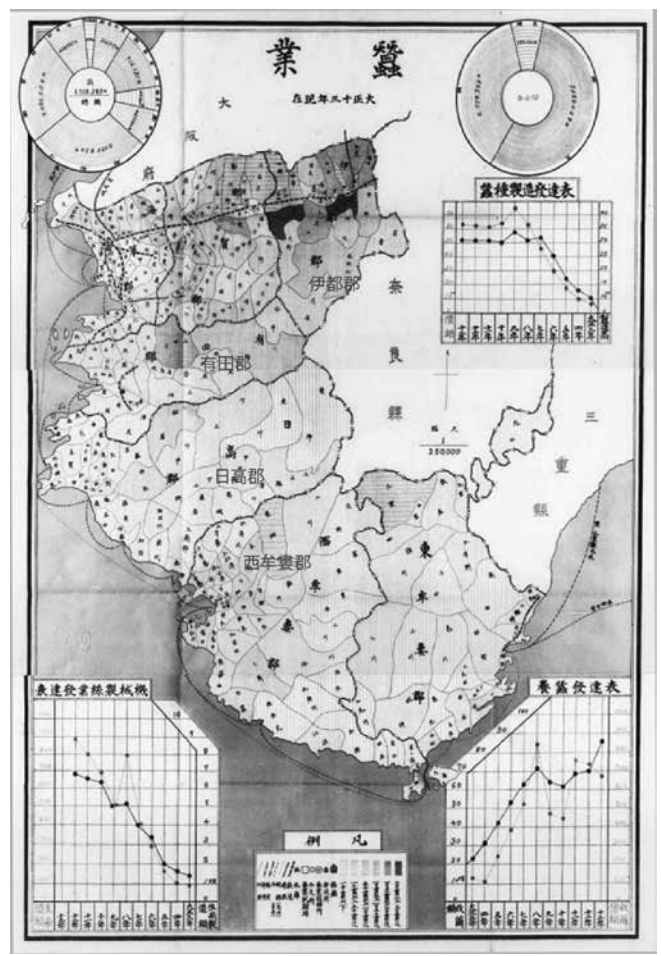
まず、高山社から和歌山県へ派遣された授業員数と、和歌山県から高山社へ学びに出た生徒数を、データベース『高山社名簿全部（授業員派遣地・生徒名簿・分教場）20121004_Excel』を用いて調査した^[注3]。その結

果、高山社から和歌山県へ派遣された授業員数は明治36年～大正9年の間で16名（のべ22名。多い方から数えると全国30番目の人数）、和歌山県から高山社へ学びに出た生徒数は明治23年～大正13年の間で71名（多い方から数えると全国31番目の人数）だとわかった。このうち、[表4]では、「どどめ」の分布が確認された[図7]の西牟婁郡、[図8]の伊都郡・有田郡・日高郡の計4地点の授業員派遣数と出身生徒数をまとめた。なお、この4地点に派遣された授業員数は9名だが、この9名の中には複数回にわたり同一地点へ派遣されている授業員もいるため、授業員数はのべ人数でまとめた。結果は[表4]に示した。それぞれの郡の位置は、[図10]で示した通りである [注4]。

西牟婁郡ではのべ授業員12名が派遣され、生徒51名が学びに来ている。伊都郡ではのべ授業員2名が派遣され、生徒6名が学びに来ている。有田郡では授業員派遣数・出身生徒数ともに0名となっている。日高郡では授業員の派遣はなく、生徒1名が学びに来ている。以上、「どどめ」の使用が確認された4地点のうち、有田郡を除く3地点での高山社とのつながりが確認された。ここから、和歌山県における「どどめ」の分布には高山社が関係しているといえそうである。特に西牟婁郡では授業員の受け入れと生徒の派遣が県内で最も盛んで

[表4] 「どどめ」の使用地点に派遣された授業員数と出身生徒数

「どどめ」の分布域	高山社関係者		
	のべ授業員数 (名)	生徒数 (名)	
西牟婁郡白浜町	図7	12	51
伊都郡かつらぎ町大字佐野	図8	2	6
有田郡金屋町谷	図8	0	0
日高郡中津村上田原	図8	0	1



[図10] 和歌山県地図

あり、高山社とのつながりの強さがうかがえる。

次に、和歌山県に派遣された授業員16名の名前を生徒名簿と照らし合わせ、高山社で生徒として学んだ経験の有無を調査した。その結果、16名中11名の名前が生徒名簿で確認され、高山社で生徒として学んだ経験を持っていたことが分かった。この11名は高山社の養蚕ことば、ひいては群馬県の養蚕ことばを身につけていたと考えられ、「どどめ」を使用していた可能性がある。なお、生徒名簿で名前が確認されなかった5名のうち、1名は生徒名簿で一字違いの名前が確認されたため、同一人物である可能性も考えられる。もし同一人物ならば、この1名も高山社で生徒として学んだ経験があるということになるが、現時点ではこの1名を除いた。これをふまえ、生徒として学んだ経験があると確定しているのは先程述べた11名だが、特にこのうち8名が群馬県出身、2名が埼玉県出身であることが生徒名簿からわかった。[図7]・[図8]・[図9]から分かるように、埼玉県も群馬県と同様に「どどめ」の使用地域である。そのため、高山社で生徒として学んだ経験のある11名のうち、10名は幼い頃より群馬県・埼玉県の養蚕ことばに親しんでいたと考えられ、「どどめ」を使用していた可能性が特に高くなる。

最後に、養蚕技術伝達の際に桑の実がどれだけ重要となるのか、どれだけ話題に上がりうるものなのかを、『養蠶法』にあたって調査した。この文献は、高山社の2代目社長である町田菊次郎氏が明治37年に高山社の養蚕法について著したものである。第1章桑樹栽培に、桑葉の重要性について以下の記述があった。引用にあたって一部表記を新字体に改めた。

桑葉は蠶兒の生命を維持する唯一の食料にして恰も吾人々類の米麥に於けるが如く一日も缺くべからざるものなり。

蠶兒は桑葉を化して生絲を製造するの器械なり故に器械にして如何に精良なるも。其絲の前身たる桑葉にして滋養を有するにあらざれば成生品たる生絲の完全を望むも能はざるなり。

町田菊次郎(1904)『養蠶法』p.32,33

桑葉を蚕の生命を維持する唯一の食材であり、どれだけ蚕が優れていても桑葉に栄養が無ければ完全な生糸を作ることはできないとしている。ここから、桑葉が蚕の飼育と生糸の品質保持の土台として重要視されていたことが分かる。また、この桑葉の栽培方法としては同章で以下の記述があった。

桑樹を栽植するには先づ其繁殖法を研究し其土地に適當なる品種を撰擇し幼苗の管理苗木の撰擇等に至るまで充分に注意するを要す。従來當地方に於ける苗木繁殖の法は實蒔法。接木法。壓條法。等(方言取木苗)。の三法にして實蒔法に依り得たる苗木を接木の砧木となし。或は壓條法中種々なる方法に依りて苗木を製出し幼苗の管理に手を盡せりと雖も。其根部の發育佳良にして鬚根の多きものを得る能はざりし。茲に於て故社長高山長五郎は文久年間數回の経験を積み遂に代出苗繁殖法を案出せり。

町田菊次郎(1904)『養蠶法』p.38,39

桑の栽培には栽培方法の研究とその土地にあった品種の選択や苗木の管理が重要であるとし、群馬県の基本的な桑栽培法として實蒔法・接木法・壓條法を紹介しつつ、高山長五郎氏が新たに代出苗繁殖法を考案したことが述べられている。このうちの實蒔法とは文字通り桑の実を蒔いて桑を栽培することであり、これにより得た苗木を接木の砧木とすることもあるという。このほか壓條法や代出苗繁殖法でも苗木は必要となるため、その苗木を育てる際に桑の実が使われた可能性もある。これら栽培方法に対する和歌山県の取り組みに関して、『和歌山県蚕業史一斑』を確認した。この資料は、大正14年に和歌山県蚕業取締所が和歌山県蚕業の沿革や大正初期の取り組み状況をまとめたものである。その第3章栽桑に、大正4年から大正13年までの桑苗の生産業者数と生産方法別の桑園面積数をまとめた「桑苗生産業者数及苗圃反別」という表がある。生産方法には、實生・接木・代出・取木が挙げられており、それぞれ『養蠶法』にある實蒔法・接木法・代出苗繁殖法・壓條法にあたると思われる。桑苗の生産業者数が最も多い大正7年には實生による苗圃面積が76,405反、接木が718,203反、代出が2,725反とされており、代出苗繁殖法に対して實蒔法と接木法による桑苗生産が圧倒的である。これをふまえても、桑の実が桑栽培において重要となることがわかり、養蚕技術伝達の際にも話題に上がったと考えられる。

以上の調査をふまえ、和歌山県で「どどめ」が分布する地点と高山社との間にはつながりがあったこと、そこで動いた人びとが「どどめ」を使用していた可能性が充分にあったこと、桑の実が養蚕技術の伝達の際に話題に上がりうるものであったことが確認できた。これらをふまえて、和歌山県における「どどめ」は高山社に



よる技術伝達の中で群馬県から伝播したものである可能性が高いといえる。

今後、仮説を更に検証していくために課題を2点掲げておく。1点目は、群馬県と和歌山県の間で「どどめ」以外にも一致する養蚕ことばがないか調査することである。具体例としては、群馬県で熟蚕を表す「ずー」が和歌山県でも使用されるかなどを調査していく。こうした桑の実以外の養蚕ことばを、和歌山県に残された方言資料の調査や、かなうことであれば和歌山県における養蚕経験者への面接調査によって確認する必要がある。群馬県方言と一致する語が他にも確認できれば、群馬県とのつながりを示すための更なる根拠となりうる。2点目は、他の都道府県に「どどめ」が伝播していないことの原因を説明するために、和歌山県への授業員の派遣の在り方とその特殊性を明らかにすることである。その一つとして、和歌山県の県農会や郡農会の役員に高山社で生徒として学んだ経験のある人物がいないかを確認することがある。明治44年から大正3年にかけて、高山社への授業員派遣要請は県農会と郡農会が取りまとめており、これら農会と高山社のつながりは強かったと考えられる。このとき、もし県農会や郡農会の役員に高山社から学び帰った人物がいるならば、和歌山県と高山社を繋ぐパイプ役となっていた可能性がある。以上の課題をふまえ、今後も検証を続けていきたい。

5. まとめ

本研究では、養蚕ことばの方言分布に着目し調査を実施した。

まず、養蚕ことばに関する全国の方言地図を収集し、調査項目と調査地域を整理することで方言地図のデータベース化を行った。データベースをもとに結果をまとめると、養蚕ことばに関する調査は全国的に広く行われており、方言地図も多数存在した。また、調査がなされた地域では養蚕業が盛んであったことがわかった。

次に、養蚕ことばの中でも地図が多く確認され、特に養蚕業に関わりが深いとされる〈蚕〉と〈桑の実〉の方言分布を取り上げ、その解釈を行った。〈蚕〉については、語形をみると、尊敬を表す接頭辞・接尾辞を付する地域では蚕を敬意の対象として扱い、養蚕が生活するうえで重要な存在であったことがわかった。ただ、尊敬を表す接頭辞・接尾辞を付する地域は減少しており、養蚕業の衰退とともに人びとと蚕との関わりも薄くなっていったといえる。〈桑の実〉については、語形が単純語である地域が、養蚕と関わりの深い地域であるとした。その中でも、「どどめ」の分布は特徴的なものであった。群馬県を中心に分布する「どどめ」が、方言圏論では解釈しにくい和歌山県に、飛び火的に分布しているという点である。そのような分布の様相を示す理由を、養蚕に関する歴史に求めることとした。

その第一段階として、群馬県と和歌山県の養蚕業における、具体的なつながりについて調査した。群馬県と和歌山県は、両県ともに古くから養蚕業が行われてきた歴史があり、和歌山県は群馬県を養蚕先進県として意識していた。養蚕技術を全国に広めることに貢献した群馬県の高山社には、和歌山県出身の生徒が71名いたことが名簿から確認できた。また、和歌山県に派遣された授業員の多くは、高山社で学んだ経験があることがわかった。このことから、和歌山県で「どどめ」が分布する地点と高山社との間にはつながりがあったことが確認され、そこでは人びとが「どどめ」という語を使用していた可能性が高いと想像される。桑の実は、養蚕業の営みの工程の一つである桑栽培において重要な存在であり、養蚕技術伝達の際に「どどめ」が出現する場面はかなりたくさんあったと考えられる。和歌山県における「どどめ」は、養蚕技術伝達の中で群馬県から伝播したものと結論づけた。

ことばには社会的・文化的背景があり、人の営みとともに存在し広がっている。養蚕ことばの方言分布はそれを裏付けるものであった。群馬県と和歌山県をつなぐをさらに明らかにするためには、両県において「どどめ」以外にも共通する語形の養蚕ことばがないか調査する必要がある。加えて、和歌山県への授業員派遣の実態を、他の都道府県のそれと比較対照することによって和歌山県の特异性を明らかにしていくことが必要である。以上を今後の課題とする。

【注】

[注1] [図5] は、新井小枝子 (2017) 「〈蚕〉を表す語彙—造語法と分布—」『地域政策研究 第19巻第4号』高崎経済大学からの引用。同様に、[図6] は、大西拓一郎編 (2016) 『新日本言語地図』朝倉書店からの引用。

[注2] [図7] は、新井小枝子 (2014) 「伊藤信吉方言資料にみる〈桑の実〉の方言分布—多様な方言資料を横断的に利用した方言研究のために—」『群馬県立女子大学国文学研究第三十四号』群馬県立女子大学からの引用。[図8] は、新井小枝子 (2011) 「〈桑の実〉を表す語彙—造語法と方言分布—」『国文学 言語と文芸 第127号』おうふう社からの引用。[図9] は、大西拓一郎編 (2016) 『新日本言語地図』朝倉書店からの引用。

[注3] 藤岡歴史館において閲覧した。群馬県立歴史博物館所蔵「高山社・蚕業学校関係資料」のうち、明治21年度～大正14年度までの、高山社授業員派遣地や生徒名簿や分教場を記した一覧表および名簿を基にして作成されたデータベースである。

[注4] [図10] は、和歌山県蚕業取締所編（1925）『和歌山県蚕糸業一斑』の口絵を基にして作成したものである。大正13年の和歌山県における養蚕業の実態と、郡および市町村の境界を示している。

【謝辞】

本研究を行うにあたり、多くのご協力をたまわった。データベースや一次史料の閲覧に際しては、藤岡歴史館の軽部達也氏と群馬県立歴史博物館の佐藤有氏に、解説およびご指導をいただいた。また、県史や方言地図に関わる資料探査や資料貸借にあたっては、群馬県立女子大学附属図書館の司書に相談にのっていただいた。この研究活動に関わるすべての学恩に、感謝申し上げます。

引用文献

群馬県史編さん委員会（1991）『群馬県史 通史編5 近世2』群馬県
群馬県史編さん委員会（1989）『群馬県史 通史編8 近代現代2』群馬県
町田菊次郎（1904）『養蠶法』高山社同窓會
和歌山県史編さん委員会（1989）『和歌山県史 近現代一』和歌山県
和歌山県蚕業取締所（1925）『和歌山県蚕糸業一斑』和歌山県蚕業取締所

引用 Web ページ

国立国会図書館デジタルコレクション 『和歌山県蚕糸業一斑』
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/978513>
国立国会図書館デジタルコレクション 『養蠶法』
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/841534>
国立国語研究所「言語地図データベース_言語地図項目DB」
（2020.03.17 言語地図集書誌DB 言語地図項目DB 更新）
https://www.2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/ladb_index.html

参考 Web ページ

国立国会図書館デジタルコレクション 『和歌山県養蚕伝習所報告. 明治29,30年』
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813435>
国立国会図書館デジタルコレクション 『和歌山県蚕業試験場報告. 第8号』
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2387592>
国立国会図書館デジタルコレクション 町田菊次郎（1915）『最近養蚕法』
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/954425>

【付録：感想】

研究活動への参加者による、本研究での取り組みに対する感想を以下にまとめる。

4年間にわたり方言学を学び、ことばと深く向き合ってきたつもりでいたが、今回研究に参加してみて、まだまだことばの世界は広く大きいものであると実感した。ことばには人の生活や文化が背景にあり、方言の実態を明らかにするには「人」を見なければいけないことは理解していた。そのため、2018年度・2019年度に実施した方言調査では、世界遺産に足を運び、実際にたくさんの人から方言を聞き取ることで、人とことばのつながりを考えた。しかし、今回、ことばの実態をさらに掴むために、「歴史」から「人」を見ることに挑み、自身が思っていた以上にことばの研究が壮大なものであるかを知った。研究からは、養蚕業の技術指導による



人びとの動きが、ことばと連動していることが明らかになり、ことばの奥深さを改めて感じる事ができた。それと共に、ことばと歴史を重なり合わせて考えることの難しさも知った。その地で方言が使われ続けること、一方で方言が消滅してしまうことには、それぞれに確かな理由があり、その理由は言語だけでなく人びとの文化や歴史にまで目をこらさなければ知ることのできないものなのだと思う。本研究を離れた後も、ことばを意識し、その裏側にある出来事にも考えを巡らせるよう、これからも向き合い続けたい。

(4年 大場椎奈・2-2執筆、総括担当)

群馬県立女子大学の国文学科で日本語や日本文学について様々なことを学んでいるが、本研究に関わることで大学での学びをさらに深めるような経験をする事ができた。

方言学を学ぶ中で、方言分布が人間の社会の動きを背景にしているということは知識として学んだが、本当にその通りになっているのか、その動きが具体的にどのようなものなのか、というところまで深く考えることはなかった。今回の調査でその背景が明らかになっていく過程は、私にとってとてもわくわくする体験であった。言語の研究は現実の社会とつながっていたのだという実感も大きくなった。この活動で方言分布の背景をどのようにして研究するのかという方法も学ぶことができ、とても勉強になった。

また、一緒に研究したメンバーやご指導頂いた方など、様々な人と関わりながら研究を進めたということも貴重な体験となった。歴史分野の研究活動や資料の扱いなど、勉強になることが多くあった。大学と図書館、自分の中にとどまらず、いろいろなところに足を運んで調査するという事の大切さを学ぶ事ができた。

今回の活動を通して様々なことを学んだ。これらの学びを、これからの自分の研究や学びで活かしていきたい。

(3年 大上舞・3執筆担当)

私は群馬県立女子大学に入学してから日本語学に興味を持ち、特に方言学に魅力を感じるようになった。方言学を学ぶなかで様々な方言分布地図を目にする機会が何度もあったが、その度になぜそのような分布となるのか疑問に思っていた。本研究で取り扱った「桑の実」の方言分布地図もその一つであり、その分布背景の解釈に少しでも携わることができたのは非常に嬉しく思う。方言学を学ぶなかで「言葉と人の動きは連動していくこと」は知識として知っていたが、今回の活動で身を持って理解することができた。そして、養蚕業の歴史や手法を学ぶにあたり、藤岡歴史館・群馬県立歴史博物館で養蚕業の歴史を研究されている方々から直接話を聞いたこと、高山社跡を見学したことも貴重な経験となった。普段は日本語学の視点から歴史を見る事が多く、こうした産業の視点から歴史を深く読み込むことはあまり無かったため新鮮であった。また、歴史分野に携わる方々の研究活動やそれを地域に還元する取り組みを垣間見ることができたことも非常に勉強となった。このほかにも、今回の絹ラボの活動を通して学んだことは数多く、どれも貴重な経験である。これらの学びを、絹ラボだけでなく大学での今後の学習や研究にも繋げていきたい。

(3年 菅野穂波・4執筆担当)

「ことばは単独で生まれるものではなく、文化や生活などと共にあるものだ」というのは頭では理解していたが、本研究を通して実感をもって理解できた。私は群馬県立女子大学に入学してから方言学というものを知り、興味を持つようになった。それから方言分布地図に触れる機会も多くなり、どうしてこの地域にこのことばの方言分布地図があるのだろうと思うことも増えていった。本研究に参加し、高山社跡で直接話を聞いたことや群馬県立歴史博物館で一次史料に触れられたことによってこの疑問の答えの糸口を見つけられたように思う。そして研究したことが地域に還元されるということを経験できたことはとても嬉しかった。本研究に参加できたことで得られた経験や考え方を今後の大学生活に活かしていきたい。

(2年 増山侑来・2-1執筆担当)

養蚕業の歴史を方言という視点から見つめることで、ことばには歴史や文化、人びとの生活との深い結びつきがあるということをもっと感じた。また、研究を進めるなかで新たな歴史の奥深さや地域の魅力を発見し、それを発信していく過程を垣間見ることができたのは、私にとって大変貴重な経験だった。地域とつながり、様々な人びととの関わり合いの中で研究を進めていく方法からは、今なお生き続ける養蚕ことばの有り様を感じる事ができた。今回の活動を通して得た知識や研究の姿勢を基礎に、これからの大学生活での学びを充実させていきたい。

(1年 佐藤瑠香・2-1執筆担当)